

シンクレア・ルイスにおける「田舎町」

——『本町通り』論のためのノート——

齋藤 忠利

十九世紀の後半から今世紀の初頭にかけてアメリカ社会に起こった大きな変化の一つに、その社会の急速な都市化現象があり、農村部と都市部の人口比が大幅に動いている。ある統計によれば、⁽¹⁾ 国勢調査の行なわれた年について、農村部と都市部の人口を数字で示すと、一八八〇年は、農村部の人口は三六、〇二六、〇四八人、都市部の人口は一四、一二九、七三五人で、人口比の百分率は、それぞれ七一・八パーセント、二八・二パーセントであったが、一八九〇年には、それぞれ四〇、八四一、四四九人(六四・九パーセント)、二二、一〇六、二六五人(三五・一パーセント)となり、一九〇〇年には、四五、八三四、六五四人(六〇・三パーセント)、三〇、

一五九、九二一人(三九・七パーセント)、一九一〇年には、四九、九七三、三三四人(五四・三パーセント)、四一、九九八、九三二人(四五・七パーセント)となり、一九二〇年には、五一、五五二、六四七人(四八・八パーセント)、五四、一五七、九七三人(五一・二パーセント)となつて、農村部と都市部の人口比は完全に逆転する。このような都市部の人口の急増は、ひとつには、アメリカ社会の工業化にともなう、農村部から都市部への人口流入によるものであるが、同時に、一九〇七年と一九一四年にそのピークを迎えた外国からの移民の流入が、都市部に集中したことも見逃せない要因であろう。ところで、こうしたアメリカ社会の急速な都市化現象

の中で、農村部と都市部の価値観の相剋・対立が顕在化し、その相剋・対立を具体的な形でかかえ込むことになるアメリカの「田舎町」(“the small town”)の問題が大きくクローズ・アップされることになる。もちろん、時代の趨勢として、「田舎町」自体が都市化の波をかぶり、なにがしかの変質を余儀なくされることにはなるのであるが、それでもなお「田舎町」は、大都市とは一線を劃しつつ、かなりのところまで「村」としての性格を持ち続けるのである。

アメリカ最初のノーベル文学賞授賞作家ハリイ・シンクレア・ルイス(Harry Sinclair Lewis)(一八八五年——一九五一年)の生まれ故郷、ミネソタ州ソーク・センター(Sauk Centre, Minnesota)は、正に、そのような「田舎町」の典型であった、と言うことができる。ルイスは、一八八五年の二月七日にソーク・センターの町に生まれたが、その三十年前までは、そのあたりは起伏する草原で、インディアンが徘徊し、駅馬車が行き交っていた。最初の植民が行なわれたのは一八五七年のことで、その年に七人のニュー・イングランド人が入植して、ほら穴に柱をならべただけの住居に住みついたが、一八五

九年には最初の木造家屋が建ち、一八六三年にはソーク・センターの町作りが本格化し、ドイツ系その他の移民が流れ込み、一八七〇年には最初の公立学校の校舎が建築され、一八八〇年には、詩人ウィリアム・カレン・ブライアント(William Cullen Bryant)(一七九四年——一八七八年)の名前に因んだブライアント公共図書館が作られ、一八九〇年までに八つの教会が設立され、酒場が八軒、営業を始めている。

一八七八年までソーク・センターの町は、駅馬車による交通の便があるだけであったが、その年にセントポール(St. Paul)、ミネアポリス(Minneapolis)、マニトバ(Manitoba)を結ぶ鉄道がソーク・センターを通ることになり、一八八二年にはソーク・センター・ノーザン鉄道が乗り入れ、この二本の鉄道が、やがて、グレイト・ノーザン鉄道と合併する。さらに一八八二年になると、ノーザン・パシフィック鉄道の支線が町を貫通する。

町の水道施設は、一八八四年に設置され、一八八九年には町の商業地区だけに設けられていた下水設備も、ルイスがイェール大学に進学した年(一九〇三年)には、町の全域に普及し、一九〇五年には、ルイスの家にバス

ルームが設けられている。

ソーク・センタリーの町を取り囲む自然は美しく、かつての大草原も波打つ小麦畑にかわり、町から十マイル四方の地域に三十をこえる湖が、小麦畑の間に点在する。

冬は、一面の銀世界、夏は、抜けるような青空に白雲が湧き、日没と日の出は壯観であり、秋は、小麦の切り株畑に鶉や雷鳥や野兎が遊び、湖水には鴨が浮かび、魚が群れ泳ぐ。……

こうした周囲の自然の美しさと引き比べると、ソーク・センタリーの町はいかにも貧弱で、見窄らしい。町の人口は、ルイスの生まれた年が二、八〇七人。一八八九年には市制がしかれたが、市とは言っても名ばかりで、ソーク・センタリーは都市化の波をかぶった村でしかなかった。それでも、ソーク・センタリーには、ハイ・スクールのレベルまでの公立学校のほかに、ビジネス・カレッジ、州立女子感化院、前述の図書館、秘密結社支部の会館、ホテル、オペラ・ハウスなどがあり、年中行事として、舞踏会、公開講座、専門の劇団の公演などが、かなり頻繁に行なわれていた。⁽²⁾

ルイスは、その代表作『本町通り』(Main Street)

(一九二〇年)において、こうした田舎町ソーク・センタリーを、アメリカの田舎町、ひいては中産階級化したアメリカそのものを象徴する田舎町として描き出しているが、ソーク・センタリーをモデルにした架空の田舎町、ミネソタ州ゴーパー・プレアリー (Gopher Prairie, Minnesota) は、「小麦と、とうもろこしの畑、酪農場と小さな木立ちがつづく一地方の、人口二、三千の町」として設定され、「その本町通りは、いたるところの本町通りの延長⁽⁴⁾」とされる。また、その規模は、女の足で一巡して三十二分、といった程度のもので、町の本町通りには、二階建て、煉瓦造りの商店、中二階のある木造家屋がならび、コンクリートの歩道と歩道の間泥だらけの車道が広がり、フォードとランパー・ワゴン^(長い箱型)が雑然と集まっている。また、本町通りと直角に交叉する横町に入ると、その横町は、町を取り囲んでいる大草原の中に入り込んでしまう。

ルイスは、ゴーパー・プレアリーの町医者ウィル・ケニコット (Will Kennicott) の妻となって、この田舎町に乗り込んでくる女主人公キャロル (Carol) の眼を通して、本町通りにならぶ建物——ホテル「シニマシ

イ・ハウス」、ドラッグ・ストア、映画館、食料品店、貴金属・宝石店、酒場、煙草屋、衣料品店、デパート「ボン・トン・ストア」、雑貨店、金物店、家具のデパート、軽食堂、フォードとビュイックの販売・修理店、農機具の大倉庫、飼料店、美術品店、玉突き場を兼ねた床屋、仕立て屋、カトリック教会、郵便局、学校、州立銀行、農民全国銀行、そのほか二十ばかりの商店や営業所、その後や、その中にまじって建てられている住宅——を克明に描いている。その描写の実例を一、二紹介すると、

ダイヤールのドラッグ・ストアは、町角の建物。整然とした、人造の石材づくりが、いかにも現実ばなれだ。店に入ると、油ぎった大理石のソーダー水売場があり、赤緑、濁った黄色のモザイク細工の笠のついた電燈がのっている。引っ掻きまわされた歯ブラシと、櫛と、ひげそり石鹸の包みの山。いくつもの棚には、石鹸の入ったボトル箱、おしゃぶり、野菜の種、黄色い包みの特許薬——結核と婦人病の特効薬。阿片とアルコールをませた悪名高い薬が、キャロルの夫が処方箋の調剤に患者たち

をよこす、正にこの店に置いてある。⁽⁵⁾

美術品店——店主は、メアリー・エレン・ウィルクス夫人。クリスチャン・サイエンス図書室も兼ねていて、毎日無料公開。美をまさぐり求めているところが、いじらしい。一部屋きりの板囲いの小屋で、つい最近、粗い化粧漆喰いを塗ったばかり。ショー・ウィンドーは、上品ぶって見当違いだらけ——木の幹をまねるはずのところ、金色の塊になってしまっている花瓶。「ゴーフアリー・プレアリーから御挨拶」と銘の入った、アルミニウム製の灰皿。クリスチャン・サイエンスの雑誌。小さな罌粟の花に大きなリボンを縛りつけた図柄を押し刷りした、ソファ用のクッション。配色のよい、刺繍用絹糸の束が、枕形の台の上に載っている。店の中に入ると、まずい絵や名画の、粗悪なカーボン写真印刷が目につき、棚には、蓄音機のレコードと写真機のフィルム、木製の玩具が載っている。そして、こういうものに囲まれて、気づかわしげな、小柄な女が、座蒲団をあてた揺り椅子に坐っている。⁽⁶⁾

ゴーフアー・プレアリーの町全体で、キャロルの目を
 楽しませた建物といえ、イオニヤ式建築の銀行だけで、
 町ができて五十年にはなるといふのに、町の美観を考
 えて建てられた建物は十指に満たず、キャロルは、この田
 舎町の「醜さをはなばなくさらけ出す厚顔無恥と、堅
 苦しいまでの生真面目さはもとより、建物の無計画性、
 一時しのぎの脆弱性、その色が褪せている不快さ」に辟
 易し、いまにも大草原の力に押し潰されそうな田舎町か
 ら、大都会の安全性を求めて逃げ出したいと思うのであ
 る。

そもそも、ミネソタ生まれではあったが、大草原の村
 の事情に通じていなかったキャロルが、ゴーフアー・
 プレアリーの町にやってくるようになったのは、キャロ
 ルが、ミネアポリスのはずれに位置しているとされるブ
 ロジェット・カレッジを卒業し、シカゴで一年間、図書
 館学を学んでいるとき、大草原の町を美化して、これを
 「ジョージ王朝時代風の家と日本風のバンガロー(茶室の
 ことら)の町」⁽⁸⁾に作りかえたい、と思立ったからである。
 キャロルはその後、三年間、セントポールの公立図書館
 で司書として働き、それから姉の知人のアパートで、

ゴーフアー・プレアリーの町医者ウィル・ケニコットに
 紹介され、一年間の求婚期間を経たのち、ケニコットに
 所望されて結婚し、コロラド州の山中で新婚旅行をすま
 せてから、「ケニコット先生」の「別嬪の花嫁さん」と
 して、ゴーフアー・プレアリーのケニコット家に興入れ
 するのである。

以上のような『本町通り』における基本的な設定は、
 アメリカ中西部の田舎町に都会的な価値観を持ち込み、
 その価値観によって退嬰的な田舎町を裁断しようとする
 試みに他ならないが、その都会的な価値観なるものは、
 「優美と明知」(“sweetness and light”)を求めてイェ
 ール大学に学んだ、田舎町の出身者たるルイス自身が田
 舎町に持ち帰ったものであって、いわばルイスは、この
 小論の冒頭でふれておいた農村部と都市部の価値観の相
 剋・対立を自己の内部にかかえた人間として、『本町通
 り』を書くことになるのである。

『本町通り』執筆の経緯については、すでに他のとこ
 ろで紹介しておいたので、ここで詳論することは避ける
 ことにするが、ルイス自身の説明によれば、一九〇五年、
 イェール大学での大学生活二年目の休暇に郷里のソー

ク・センターに帰ったルイスが、田舎町の人々の詮索好きに嫌気がさし、「田舎町の栄華」("the glory of the small town")とされる「隣人愛」("neighborliness")

なるものが、その大半は「まやかし物」("a fake")であることに思い至って、自分自身をモデルに若い弁護士ガイ・ポロック(Guy Pollock)を主人公にした作品『村落病ウイルス』("The Village Virus")を書き始め、二万語ほど書き進められたところで、その作品は未完のまま放置され、その草稿が散逸してしまっただけ、二年たってから新しい構想のもとで書き始められたのが『本町通り』である、ということであった。

ところが、このようなルイス自身の説明が、実は、全く事実に相違しており、ルイス自身をモデルにしているとされるガイ・ポロックは、一九〇五年の前後、一年足らずの間ソーク・センターの町で弁護士業を開業していた独身の変わり者チャールズ・タウンゼンド・ドリオン(Charles Townsend Dorion)なる人物をモデルにしたものであり、また、まことに信じ難いことであるが、散逸してしまったとされる『村落病ウイルス』の草稿は、そもそも書かれてさえいなかった、という事実を、マー

ク・シヨラーの『ルイス伝』(Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life*) (一九六一年)は明らかにした。

ルイスの記憶違い、もしくは錯覚と考えるにはあまりにも重大な、このような事実の歪曲は、自分の作品に解説を加えることを求められた作家が、手の内を見せないために張りめぐらす煙幕の如きものであろうが、ルイスの語っていることは、いかほど客観的な事実から掛け離れているにせよ、ルイスにおける心理的な真実を伝えているのであって、ルイスは、ガイ・ポロックという人物を造形することによって、田舎町に埋もれてしまった場合の自己自身の姿を想定している、と考えることができる。ガイ・ポロックが好ましい人物として描かれているのは、ひとつには、そのためであろう。

〔因みに、キャロルは、ゴーフアー・プレアリイに住むようになって、ガイ・ポロックと知り合うと、田舎町には珍らしい人格者であるガイ・ポロックのような人間が、なぜ、型にはまったような訴訟事件を手がける仕事が続けながら、ゴーフアー・プレアリイに留まっているのか、不思議に思い、機会を捉えて、衝動的にガイ・ポ

ロックにたずねる——

「あなたともあろう方が、なぜ、この町に留まってい
らっしゃるの？」

「村落病ビールスにとりつかれているからですよ」

「危険のようですわね」

「危険ですとも。こうして煙草をすうのをやめないで
いると、わたしが五十歳になって必ずかかる癌よりも、
もっと危険ですよ。村落病ビールスというのは——鉤虫
に非常によく似ているのですが——地方にあまりにも長
いこと引きこもっている野心家の人々に取りつく病原菌
で、弁護士と医師と牧師と大学卒の商人たち——ものを
考え、笑い声をあげる人々の世界を一瞥してはいるもの
の、もとの湿地に帰ってきてしまっている、こういう人
たち全体の間蔓延しているのが、おわかりになるでし
ょうよ。わたしが、完全なる、その一例です。……」⁽¹¹⁾

従って、ルイスが多少なりとも理想化した自己を投影
している人物たるガイ・ポロックが、田舎町を描く作品
の主人公となる可能性は充分に存在したわけであるが、
そのガイ・ポロックが『本町通り』においては脇役的な
人物の位置を占め、ガイ・ポロックにかわって、大学卒

の女性キャロルが、田舎町に都会的な価値観を持ち込む
人物として——そのような意味において、キャロルは、
かなりのところまで、ルイス自身である——『本町通
り』の主役の座を占めることになったのは、ルイスが一
九一六年の四月に、実に十年ぶりに最初の妻グレイス
(Grace)を伴ってソーク・センターの町に「里帰り」を
したことによるところが多い。つまり、ルイスは、アメ
リカ東部出身の教養ある女性であった妻グレイスのよう
な女性が、田舎町の町医者であったルイスの父親、もし
くは、同じく町医者となったルイスの兄のような男性と
結婚して、田舎町に住みつくことを想定して、『本町通
り』の構想を得たものと思われるのである。しかも、こ
のようにして『本町通り』の基本的な設定が見定められ
たとき、ルイスにおける農村部と都市部の価値観の相
剋・対立が、田舎町に対する評価をめぐって意見を異に
する一組の夫婦の夫婦関係の中に持ち込まれていくこと
になるのであって、『本町通り』が最終的に、ルイスに
おける田舎町の問題が夫婦関係の緊張を増幅する仕組み
をもつ作品となっているのは、このためである。

だが、結論を急ぐ前に、具体的に検討を加えておかな

ければならないことは、ルイスにおける田舎町の問題が、まず、ゴーフアー・ブレアリイに乗り込んでくるキャロルと、キャロルを迎えた町の住民たちとの間の相剋・対立という形をとる、という設定である。キャロルは、キャロルを歓迎するパーティに出席して、町の住民たちに紹介されるが、そのパーティには、町の若いハイカラ連中、狩猟仲間の名士たち、ちゃんとしたインテリ連、堂堂たる金満家たちが揃っているというのに、会話と呼べるようなものはなく、口を開けば話題は低級、しかも限られていて、いかにも視野の狭い人々ばかりであり、なにかと言えば、ゴーフアー・ブレアリイ出身の大立物ということ、ボストンで自動車工場を経営しているパーシー・ブレスナハン (Percy Bresnahan) の自慢をする、といった具合いで、まるで地上最高の人間がゴーフアー・ブレアリイに集まっている、と言わんばかりの、鼻持ちならない独善ぶりを発揮する。また、自分たちがいつでも健全なアメリカ精神のバックボーンになっていると称して、なににせよ新しい実験的な試みに警戒心を抱き、労働組合を敵視し、道徳家をもって任じている。ルイスは、こうした町の住民たちを、明らかに揶揄しながら

ら描いている。たとえば、

金融業者であり、アメリカ北部に材木を伐採した土地を所有するルーク・ドーソン (Luke Dawson) は、引込んだグレイトの服を着込み、乳白色の顔から目がとび出している。その細君は、色あせた頬、色あせた髪、色あせた声、色あせた態度をしていた。身につけている高価な、緑のドレスには、胸に金と銀のモールの飾りがあり、ビーズの縵がつき、背中のボタンとボタンの間を大きくあけて、まるで、そのドレスはセコハンで買って、もとの持ち主に出くわすのを恐れてでもいる、というふうであった。⁽¹²⁾

また、ルイスは、「穴居人の一人で、猛禽類として令名が高い——細長い鼻は急降下し、口は海亀の口、眉は太く、頬は赤ぶどう酒の色、白髪が真綿のような」銀行の頭取りエズラ・ストウボディ (Ezra Stowbody) に、

「利潤配分とか福利事業とか保険とか老齢年金なんて

ものは、すべて要するに、くだらないものですな。労働者の独立心を弱め——それに、正当な利潤を、ごっそり捨てるようなものだ。まだ耳の後が乾いていない(未熟の)世間知らずの思想家や、例の婦人参政権論者、また、実業家に経営法を教えるなどと、そこら中のお節介ども、それに大学の教授連中のなかにも、同じ程度に、けしからんのがいるが、こういう連中を全部ひっくるめて言えば、神の恵みに浴した天下の、偽装した社会主義者に他ならん！そこで、生産者としてのわたしの当然の義務は、アメリカの産業の健全性に対するあらゆる攻撃に、とことんまで抵抗することにある。そうするとも！」⁽¹³⁾

と、言わせている。

キャロルは、このような町の住民を相手にして、彼女なりの理想と使命感に従い、新しい形式の新宅開きのパーティーを計画したり、芝居の上演を企画したりして、町の改革を押し進めようとするのであるが、結局キャロルの努力は、町の住民たちの響きを買ひ、キャロルの理想とするところが、なんとも底の浅いものであることを暴

露する結果となり、キャロルの持ち込んだ都会的な価値観が、田舎町の価値観によって逆に批判されることになるのである。しかも、その場合、キャロルの夫のウィル・ケニコットが、田舎町の健全な面を象徴する人物として設定されており、キャロルの都会的な価値観が、浮気な妻の軽薄さという形で批判されることになるのである。

もちろん、キャロルは、ゴーフアー・ブレアリーの住民の中にも、彼女の理解者を発見する。その代表的な人物は、さきにふれた弁護士のカイ・ポロックであり、高校の先生をしているヴィーダ・シャーウィン(Vida Sherwin)である。ヴィーダは、キャロルの夫ケニコットのかつての恋人であり、キャロルがケニコットの妻としてゴーフアー・ブレアリーの町にやってくると、自分の初恋の相手を横取りした女としてキャロルを憎むどころか、キャロルが自分の身代わりにケニコットに嫁いだ分身でもあるかのように、キャロルの庇護者をもって任ずるようになる。もともとヴィーダは、田舎町の現状に関してキャロルよりは現実的な考えを持っており、キャロルの性急な理想主義に対して批判的である。やがてキャロ

ルには男の子が生まれ、また、長いこと独身であったヴァーダは、デバート「ボン・トン・ストア」のマネジャーを勤めるレイミィ・ワザスプーン (Raymie Wutherspoon) と結婚して、教職を退く。キャロルは、子供の養育に専念する傍ら、読書に耽るが、その読書を通じてアメリカの田舎町に関する一種の確信を抱くに至り、その確信をヴァーダに披瀝する。

キャロルが確信したところによれば、従来、アメリカの田舎町については二つの伝統的な考え方しか存在しなかった。そのうち、第一のものは、田舎町をも含めてアメリカの村落は相変わらず、友情と誠実さに満ち、清らかで美しい結婚適齢期の娘たちにふさわしい唯一の安住の地である、とする考え方であって、パリで絵の修業をして名をあげたり、ニューヨークの金融界で成功した男たちも、最後にはスマートな都会女に嫌気がさし、それぞれの生まれ故郷に帰ってきて、都会というところは邪悪なところだ、と断言し、幼な友達と結婚して、終生、自分たちの町に楽しく住むことになる、とされる。

もう一つの伝統的な考えとは、すべての村落の重要な特色は成金趣味と、抜け目のない軽佻な老人の存在であ

る、とするもので、この考え方は、寄席の舞台や、滑稽な挿し絵、シンジケート組織の新聞のユーモア記事を支配している。

キャロルは、以上二つの考え方は現実の田舎町の実態を掴んでいないとして、これを斥け、現実の田舎町は、安物の自動車、電話、レディーメイドの衣服、サイロ、アルファルファ、コダック・カメラ、蓄音機、皮張りのモリス式椅子、ブリッジ大会の賞品、石油の株式、活動写真、土地の売買、読んでもいないマーク・トウェイン全集、国内政治の純正版というべきものを、ものを考えるための観点としている、とする。

そこで、そのような田舎町の生活に飽き足らない人間——とくに青年たち——は、都会に逃げ出し、都会の伝統が作りものであるにも拘らず、都会に踏み留まって、休暇にさえ帰郷しようとしなくなる。その理由は、田舎町の実態として、「相像力を欠く規格化が行なわれている背景、ものぐさな話しぶりと生活態度、うわべだけの世間体をとりにくくする欲求が、精神面をきびしく支配している事実。満足……生きている人々がせわしく歩きまわるのを嘲笑する、もの言わぬ死者の満足。唯

一の積極的な美德として崇められている自己否定。幸福の禁止。自ら求め、自ら守り続ける奴隷状況。規格化された倦怠⁽¹⁵⁾といったことがあるからである。

キャロルも、あらゆる国の、あらゆる時代の田舎町はすべて、退屈であるだけに留まらず、卑劣で、無情で、好奇心にとりつかれる傾向があり、田舎町に見られる小心翼翼⁽¹⁶⁾が避け難いことは認めようとする。しかし、全面的に規格化し、純化したものになろうと苦心し、世界第一の凡庸国としてヴィクトリア朝の英国の後釜にすわろうと熱望するアメリカの村落ともなれば、もはや田舎であるとはかりは言っておられず、起伏する丘の葉蔭で無知蒙昧に安んずることはできない。そこで、アメリカの村落は、この地上を支配しようとする一勢力として、自信満々、他の文明世界にむかって威張り散らしてみせるが、安い自動車、一ドル時計、安全剃刀を大量生産して、全世界の人間がそれらの品物を使用することに人生の終局的な目的を見出すように仕向けているようでは、たとえ偉大な世界の一部であると自負し、自らをローマやウィーンになぞらえようと、科学的な心、国際的な精神を欠いていることになってしまう。

このようにしてキャロルは、ゴーフアー・ブレアリーののような町々の表面にあらわれた醜悪さを分析し、その根本的な原因は、普遍的な類似性の問題にある、として、次のような結論を下す。

普遍的な類似性——それが、退屈至極な安全性の哲学の具体的な表現なのである。アメリカの町の十分の九は、お互いに全く似たりよったりなので、甲の町から乙の町に移ることは、退屈きわまることである。ピッツバーグの西では毎度のこと、その東でも、しばしば、同じような材木置場があり、同じような停車場、同じようなフォードの修理工場、同じようなクリム製造工場、同じような箱型の家屋と二階建ての商店がある。新しい、もっと自覚的な家屋でも、多様性を狙う試みそのものが似たりよったりであって、同じようなバンガロー、同じように四角な、化粧漆喰を塗るか、タペストリイまがいの煉瓦の家々なのだ。商店は、全く同じ規格品で、全国的に宣伝されている商品を陳列し、三千マイルもへだたった地域の新聞が、それぞれ同一の「シンジケートによる特集記事」を掲載し、アーカンソー州の若者は、デラウェア

州の同じような若者が身につけている、同じように派手な出来合いの服を見せびらかし、二人が二人とも、同じ新聞のスポーツ面でおぼえた同じ俗語の言いまわしを繰り返し、その一方が大学生で、他方が床屋のあんちゃんであつても、どちらがどちらなのか、誰にも見当がつくまい。⁽¹⁶⁾

以上のようにルイスが、キャロルを通してアメリカの田舎町に加えている批判は、それなりに手きびしいものであり、その批判には、たしかに、意地の悪い諷刺の棘がある。しかし、T・K・ホイップル(T. K. Whipple)が鋭く指摘した⁽¹⁷⁾ように、田舎町に対するルイスの敵意には、ルイスが田舎町から受けた敵意に対する仕返しのようなところがあり、ルイスは、折あらば田舎町の欠点・弱味を衝いてやろうと身構えているかの観がある。

また、その一方で、ルイスの諷刺には、都会生活の中で自意識を強いられた田舎者の自嘲といったところがあり、他人から自分の欠点を嘲笑されないうちに、まず自分で自分の欠点をさらけ出し、そうすることによって他人の嘲笑を免れようとする意図が隠されているようにも思わ

れる。その上ルイスは、ひそかに田舎町の美点を匂わせようとするのである。

たとえばルイスは、キャロルがゴーファー・プレアリーの町を一巡して、その俗悪さに絶望したとき、時を同じくしてゴーファー・プレアリーの町を見て歩き、その「豪華さ」に感嘆した女性のあつたことをつけ加える。これは、田舎町の俗悪さを美しいものと考えた百姓娘ビー・ソレンソン(Bea Sorenson)——のちに、キャロルの女中となる——の無知を笑うエピソードとして読むことも可能であるが、少なくとも、田舎町に対するキャロルの見方が唯一・絶対のものではないことを示すものであつて、さきにキャロルの目を通して描かれたダイヤールのドラッグ・ストアは、ビーの目を通して描かれると、こういうことになる——

ドラッグ・ストアには、とてつもなく大きい、とんでもなく長い、美しい総大理石づくりのソーダ水売り場。その上に、とっても大きな電燈。これまで見たこともないような大きな笠がついている——いろんな種類の色ガラスをはり合わせた笠。ソーダ水の蛇口、これは銀だ。

そして、電燈の台の下から、いきなり突き出ている！

ソーダ水売り場のうしろに、ガラスの棚があって、聞いたこともないような新しい種類のソフト・ドリンクの壺がならんでいる。誰か男に連れられて、ここに入れたら！⁽¹⁸⁾

また、あれほど田舎町の俗悪さを嫌った当のキャロル自身が、夫のケニコットと別居までして首都ワシントンで一年も働くと、その仕事にも嫌気がさし、田舎町の生活をなつかしく思い始めるのである。折も折、キャロルがふさぎ込んでワシントンの通りを歩いていると、ワシントンに立ち寄ったゴーフアー・プレアリーのデパート「ボン・トン・ストア」の経営者ハリイ・ヘイドック(Harry Haydock)とその妻ジュアニータ(Juanita)に再会し、キャロルは思わず駆け寄って、ジュアニータにキスをする。その後、キャロルがワシントンに来て十三ヶ月目に、夫のケニコットが上京して来ることになり、キャロルは、いわば第二の求婚期間を経験したのち、なお五ヶ月ワシントンに留まってから、夫のもとに帰ることになる。ゴーフアー・プレアリーの町は、キャロルが

二年ほど留守をしていた間も、殆ど変化がなく、キャロルは相変わらず田舎町の批判を続けるつもりではいるが、もし自分に帰るべきところがあるとすれば、それはゴーフアー・プレアリーを描いて他にはないことを思い知らされるのである。

従来、一般に、シンクレア・ルイスにおける田舎町の問題は、カール・ヴァン・ドーン(Carl Van Doren)のいわゆる「村落への反逆」(“the Revolt from the Village”)の一形態として捉えられ、ときには、オリヴァー・ゴールドスミスの長詩『荒廃した村』(Oliver Goldsmith, *The Deserted Village*) (一七七〇年)あたりから始まる、村落の問題につながるものとされ、また、『本町通り』は、エドガー・W・ハウの『ある田舎町の物語』(Edgar W. Howe, *The Story of a Country Town*) (一八八三年)、エドガー・リー・マスターズの詩集『スプーン・リヴァー詞華集』(Edgar Lee Masters, *Spoon River Anthology*) (一九一五年)、シャーウッド・アンダソンの短篇集『オハイオ州ワインズバーク』(Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio*) (一九一九年)などの系列にならぶ作品とされるが、『本町通り』がア

メロカ文学の歴史の上で空前の大成功を納めたことについては、それなりの理由があるのであって、『本町通り』を、たとえば『オハイオ州ワインズバーグ』と比べてみると、なるほど『本町通り』は、屈折した人間心理の歪みを追求する心理小説の洞察力には欠けるとはいえ、その「痛みを伴う永遠の喜劇」のおかしみには、アンダソンの短篇集の病的な倒錯した世界のやりきれなさとは無縁な後味の良さがある。

『本町通り』は、アメリカの田舎町に対するルイスの愛憎半ばする苛立たしさを創作のエネルギーとしているだけに、小説家に不可欠な想像力の不足を写実的な模写と耳のたしかさで補なっているとされるルイスの作品としては、思いのほかルイスの肉声が聞かれる作品であり、たわいのないキャロルの夢と理想の中に、リアリズムの作家ルイスの中に共存するロマンティシストの感傷を読みとることが可能であり、『本町通り』が出版後まもなくフロベールの『ボヴァリー夫人』(Gustave Flaubert, *Madame Bovary*) (一八五七年) に擬せられたのも、故なしとしない。

また、『本町通り』の爆発的な人気には、この作品が

一九二〇年に出版されたことが大いにものを言っている。ウォルター・リップマン (Walter Lippmann) によれば、一九二〇年の大統領選挙は、デモクラシーの理想とアメリカ社会の無限の発展に対する楽天的な信頼の終焉を画するものであって、ウィルソン大統領のもとでヨーロッパ大戦に参加したアメリカの国民は、デモクラシーの理念に疑問を抱くようになり、また、国際連盟への加入をめぐる議論を通じて、複雑な国際情勢の中に置かれたアメリカ人の生き方を考えざるを得なくなっていた。その上、アメリカは世界の経済大国としての実力をそなえるようになっており、アメリカ国民は、自己吟味の必要を感じていた。そこで『本町通り』は、タイミングよく、その必要を満たすことになった、というわけなのである。

これを文化的・精神的に言えば、それまでヨーロッパの田舎でしかなかったアメリカが、国際的な舞台に登場することで、その田舎者としての自意識を強いられ、その自意識の克服を迫られた、とすることができるとルイスの『本町通り』は、すでに見たように、一義的には、ルイス個人における、強いられた田舎者としての自意識がルイスに書かせた作品であるが、このようなルイスに

おける田舎町の問題は、たんに、アメリカ国内の都市と田舎町の対立・相剋という関係の中にのみ捉えられるべきものではなく、ヨーロッパ対アメリカという関係の中に拡張して捉え得る問題なのである。現にルイスは、すでに、その処女作とも言うべき長編『わが社のレン氏』(Our Mr. Wrenn) (一九一四年)において、イギリス旅行を試みたアメリカの青年がアメリカを見直し、平凡なアメリカ市民として家庭生活を楽しむようになる話を書いているし、また、「本町通り」が「文明の極致」をもって任じ、「ハンニバル (Hannibal) がローマに侵入し、エラスムス (Erasmus) がオックスフォードで著述した」のは、フォードの自動車「デパート」ボン・トン・ストア」の前に置かれるようになるためであり、「食料品店の主人オール・ジェンソン (Ole Jenson) が銀行家のエズラ・ストウボディに話すことが、ロンドン・ブラーハ、海上の金儲けの種にもならぬ小島で守られるべき法律となる」⁽²²⁾とするアメリカの田舎町の思ひ上がりは、それがいかにも笑止千万な思ひ上がりであるだけに、ヨーロッパに対するアメリカ人の劣等感がいかに抜き難いものであるかを裏書きしている。

総じて、一九二〇年代のアメリカ文学の特徴は、アメリカが世界の大国として国際舞台に登場するという事実を背景とした、その文学の国際化であり、その象徴的な事件が、ルイスのノーベル文学賞授賞(一九三〇年)であるが、ルイスにおける田舎町の問題は、ヨーロッパ対アメリカの力関係の歴史の上で転機を画する時代に生きたアメリカ人の、自らを恥じつつ自らを主張するというような、自己検証と自己主張の交錯する、極めて興味ある問題を提供しているのであって、経済大国を標榜する今日のわれわれにとっても決して無縁な問題ではない筈である。

(1) S. E. Morison and H. S. Commager, *The Growth of the American Republic* の巻末に付けられた統計資料による。なお、アメリカの国勢調査による基準では、人口二、五〇〇人以上の町の人口は、都市部の人口として計算されている。

(2) 以上の叙述は、Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life* の記述に負っている。

(3) Sinclair Lewis, *Main Street* (Printed for the Members of The Limited Editions Club at The Lakeside Press, Chicago), p. xvii.

(4) *Ibidem*, p. xxiii.

- (5) *Ibidem*, p. 28.
 (6) *Ibidem*, p. 29.
 (7) *Ibidem*, p. 30.
 (8) *Ibidem*, p. 8.
 (9) 『本町通り』(*Main Street*) (1920) 覚え書き』(『言語文化』No. 7) を参照。
 (10) Cf. Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life*, p. 102.
 (11) The Limited Editions Club *Main Street*, p. 126.
 (12) *Ibidem*, p. 34.
 (13) *Ibidem*, p. 40.
 (14) キャロルが読んだ書物は、若くはアメリカの社会学者、若くはキリストの聖書注釋者、ロシヤの探偵小説作家たち、アンソニー・フランク (Anatole France)、『ロハン (Rohand)』、ネクソ (Nexö)、『オウエクス (Wells)』、『シェー (Shaw)』、『キー (Key)』、『エドガー・リー・マスターズ (Edgar Lee Masters)』、『エドワード・テイラー (Theodore Dreiser)』、『シャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson)』、『ヘンリー・メンケン (Henry Mencken)』やその女性たちが参考としてゐる破壊的な哲學者や芸術家の著作として引用されてゐる。(Cf. The Limited Editions Club *Main Street*, p. 214.) なお、カール・ヴァン・ドレンが、一九一五年から一九二〇年代の初期にかけて書かれた、アメリカの村落を攻撃する作品はすべて、ヘムガ
- ーロー・ベスタースの詩集『スティーブ・リッパマー詞集』を種本にしてつづらるゝ意味のこゝろを説いたと云ふルイスは——キャロルがベスタースのものを讀んでゐることを示す——『本町通り』の詩集の題に於て、ベスタースの詩を引いたと云ふことは、そのことを示す。 (Cf. Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life*, p. 296.)
 (15) The Limited Editions Club *Main Street*, p. 215.
 (16) *Ibidem*, p. 218.
 (17) Cf. T. K. Whipple, "Sinclair Lewis" [Mark Schorer (ed.), *Sinclair Lewis: A Collection of Critical Essays*, p. 77.]
 (18) The Limited Editions Club *Main Street*, p. 31.
 (19) Cf. Anthony Channell Hilfer, *The Revolt from the Village 1915—1930*, pp. 8—12.
 (20) Cf. The Limited Editions Club *Main Street*, p. xii. 『オウエクス』 Cf. Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life*, p. 296.
 (21) Cf. Walter Lippmann, "Sinclair Lewis" [Mark Schorer (ed.), *Sinclair Lewis: A Collection of Critical Essays*, p. 84.]
 (22) The Limited Editions Club *Main Street*, p. xvii. (一橋大学助教授)